

## 「異邦人の歩み」

エペソ人への手紙 4 : 17 - 18

April.31.2024

### エペソ人への手紙 4 : 17 - 18 (パウロ)

#### Preface

ある教会学校の先生が、子どもたちにこんな質問をしました。

「私たちが天国に行くためには、どのようにすればいいでしょうか？」

すると、直ぐに子供たちが答えます。

「イエス様を信じれば天国に行けます。」

嬉しいですね、ちゃんと分かっています。

そこで、さらに質問しました。

「では、私たちが地獄に行くためには、どのようにすればいいでしょうか？」

一瞬、静寂に包まれましたが、直ぐに一人の女の子が答えました。

「何もする必要はありません。そのままいれば、地獄に行きます。」

御名答ですね。

私たち生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれてきた生まれながらの、いや、母の胎に宿るその瞬間から残念ながら罪人である私たちアダムとエバ以降のすべての人間は、黙っていても燃えるゲヘナに投げ込まれる運命にあります。

キリスト教の救いは、そこからの救いです。

でも人間賛歌に溢れているこの世界において、いきなり、「あなたは生まれながらにして燃えるゲヘナに投げ込まれる運命にある罪人です」という内容から人に伝えますと、変な誤解を生んでしまい兼ねませんし、不必要に気持ち悪がられたり、相手の気分を損ねてしまうかもしれません。

そこで、戦略的な宣教という面から、「神様はあなたを愛しています。神様はあなたのために素晴らしいご計画を持っています」という柔らかい比較的人当たりの良い表現をもって伝えアプローチしようとするのが、福音伝道の定型かと思います。

とろろが、これがまかり間違うと、「イエス様信じると、何かいいことあるらしいよ」みたいな宗教のご利益程度に「救い」を捉えてしまうと、見当違いなことになってしまうでしょう。

むしろ、クリスチャンになると、試練に会ったり、苦難を通ったり、痛みを経験するのが普通だと思います。

つまりは、神を父とし、父なる神の愛を受けた神の子に相応しく変えられていくための過程に入れられたということです。

キリスト教また聖書の言う「救い」とは、何かこう気分が良くなるとか、病気が癒されるとか、必要な物質が与えられ、合格し昇進するようなものとは一線を画します。

もちろん、それが大いに伴うことも約束されていますし、必要であるならば、神様は私たちに十分に与えて下さいますが、それらが与えられることが目的でもなく、「救い」でもありません。

キリスト教の救いは、何もせずに黙っていたら、そのまま地獄に行ってしまうところからの救いですね。

私たち人間は、エペソ書2章でも見ましたし、創世記3章にも書いてあります通り、神との関係を保ち続けることよりも、目に慕わしく見えるものを追いかけていくサタンの惑わしを自らの意思で選び取って行った罪の本能ゆえに、むなしいところを生き、むなしいところへと投げ込まれてしまうこととなりましたが、キリストにあつて救われ神の子とされた者たちには、神さまのすべての豊かさに与る、キリストの身丈にまで達するところまで導かれるという約束を頂きました。

それゆえに、以前とは、神をキリストを信じる前とは、違う生き方が求められますし、キリストの霊が私のうちあるならば、自然と以前とは違う生き方を求めるようになって行くでしょう。

使徒の働きに出て来る聖霊に満たされたキリスト者たちも、以前とは違う生き方を自らの意思で求めるようになっていきました。

そして、その彼らの生き方は、強大なローマ帝国を揺るがす程のインパクトを与えました。

神さまは、私たちキリスト者がこの世におけるインパクトとなり、驚きとなり、祝福となることをご計画し願っておられます。

だから、イエス様が「あなたがたは世の光です。地の塩です」と仰ったわけですね。

この神様の願い・ご計画を直接啓示として受け、知っていた使徒パウロ先生は、今日の聖書箇所です、

#### エペソ人への手紙4：17（パウロ）

と、気を引き締めるような重々しい語調で語ります。

この言葉は、今日に生きる私たちにも同様に語られていることですよ。 「以前のように、目に慕わしいものに翻弄されながらの生き方とは違う生き方を、あなた方はしなければなりません」と厳かに、厳しく命じて下さいます。

### Part One

もちろんだからと言って、物欲を満たしてはいけないとか、日用の糧を得る

ための労働や経済活動をしてはいけないとか、やりたいことや行きたい所や食べたいものをやったり、行ったり、食べたりしてはいけないということではありません。

イスラエルの三代目王であったソロモンは伝道者の書で、このことについて、「実に神は、すべての人間に富と財を与えてこれを楽しむことを許し、各自が自分の労苦によって受ける分を喜ぶようにして下さった」と、与えられた人生を楽しむことは、神からの賜物であることをはっきりと教えてくれています。

私たちこんな分厚い聖書を持っていますが、神様が私たちに神の言葉である聖書をお与え下さった理由は、この世に対して何の意欲も抱かず世捨て人のように生きるよう勧めるためではなく、来る世ばかりか、この世でもこの世界でも幸いに、幸せに、喜んで生きられるようにと、生きて欲しいと願ってのことです。

**申命記 4 : 39 - 40 (パウロ)**

**申命記 5 : 32 - 6 : 3 (パウロ)**

神さまは、私たち人間の幸せを誰よりも願っていて下さいます。

なぜか？

私たちは生まれながらの罪人であるがために、その歩みは、生まれたままの自然のままの状態では、否が応にも、霊からの、人間の根本的なところからの幸せではない不幸なところを歩んでしまい、結局は死を恐れ、死に抗うことに人生のすべてを消費するかのようになってしまう、しかも永遠の滅びへと至ってしまうからです。

「そんなことはあってはならない！」と、「そんな風にあって欲しくない！」と、イスラエルの民を選びなされ、神の言葉を書き記させ書き残させ、国が滅びてもその書き溜めた神の言葉は滅びることなく、その言葉が全世界に広がっていき、私たちにも届き、すべての民族や人種の人々が神の言葉に触れ、神の言葉に生き、人間の根本からの幸せを生きられる道を開いて下さいました。

そしてクリスチャンたちは、そのことを恵みの内に受け、知った者たちです。知っている者であるはずです。

ところが、使徒パウロが2000年前に憂慮し、今の時代にまで使徒パウロの憂慮が有効になってしまっている状態というのが、私たちクリスチャンたちが、意外に神の言葉を知らない、覚えない、蓄えない、自分の趣向に合わない言葉は受けとめない、知った風でいる、そしてその知った風が、結局、神の言葉を自分の思い描く内容や意味に置き換えてしまい、聖書が語る信仰ではなく、自らが思い描く信仰スタイルを新たに自らの内に作り出し、結果的に神の言葉をなめているような生き方をしているということです。

だから、使徒パウロは厳かに真剣に問うわけです。

「神の言葉をなめず、キリストを神を信じない異邦人と同じようなむなしい心で、その人生を歩んではいけません」と、問うわけです。

私たちの人生で抱く欲は71種類に分類することが出来るようですが、聖書の御言葉から考えますと、エペソ4：17で言う「異邦人のようなむなしい心」とは、物欲、食欲、性欲、名誉欲、所有欲、支配欲、攻撃欲、趣味欲、競争欲、自己顕示欲などのありとあらゆる欲を満たすことをその人生の目的にして、死を恐れ、死に抗うかのように欲を満たすことに時間のすべてを消費しながら生きてしまうことを言うようです。

## Part Two

聖書の中に登場してきます「むなしい」という言葉を考える時、ぜひ考慮しなければならない聖書箇所は、先程も少し言及しましたが、ソロモンが書いた伝道者の書だと思えます。

ソロモンという方は、神さまから、

### 列王記第一3：12-14 (パウロ)

と宣言された人類史上唯一無二の特別な存在でした。

人類史上最高の知恵、最高の富、最高の人格と備えさせて頂いたソロモンは、特別な人として、特別な人生を生きますが、「ある意味、神さまが特別にお立てになった、全人類に示す、人類史上最大の反面教師でもあったのかなあ」と思っております。

パウロの言った、「あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません」というこの言葉の反対、つまり、「にもかかわらず、異邦人のようにむなしい心でその人生を歩むこと」を選び取って行き、結局、「ああ空しい。ああ空っぽだ。ああ無意味な、ああ無益な、ああ目的を見出すことが出来ない」という、人として「そんなことを口にするような人生なんか生きたくない」という人類史上最も明確な無念、後悔を残した人として歴史にその名が刻まれました。

かと言って、ソロモンが今、地獄にいるとは思いません。

なぜならば、むなしい人生を生きてしまった最後の最後の晩年に、そのむなしい生き方を悔いて神に立ち返った様子が、しっかりと聖書に書き残されているからです。

即ち、「神さまは全人類に、そしてここにいる私たち一人一人に、『決して、ソロモンのようなむなしい心でその人生を歩んでほしくはありません』という痛恨の極みのような思いを伝えるために、ソロモンという人を生まれさせ、生きさせ、その人生を用いられたのかなあ」と思うのです。

ソロモンの言葉を見てみましょう。

## 伝道者の書 1 : 1 - 18 (パワポ)

ソロモンは言います。

「空しい空しい、ああ空しい。なんと空しいんだ。どんなに強い風が北から南から吹いたとて、その風は跡形もなく吹き去って行き、どんなに大量の水が海に流れ込んだとしても、海が満ち溢れることがないように、私たちの目はどんなに多くのものを立派なものを見たところで満足することもなく、私たちの耳がどんなに多くの素晴らしい音を聞いたところで満ち足りることもない。

人類史上最高の知恵と知識を持ったところで悩みはなくならないし、むしろ、知っていることが多いゆえに苛立ちばかりが募ってしまう。

これもまたなんと空しく、掴みどころのない風を空気を掴もうとするような無毛な戦いなんだろう…」

ソロモンが、神より与えられたその特別な知恵と知識とを駆使しながら、言葉巧みに語ったことは、結局、人生の空しさでした。

神を認めない人生の空しさです。

さらに2章に入りますと、この世界に生きるある意味すべての人が、どんなに少なく見積もっても一度は憧れを抱く快樂や所有や権力に思う存分没入してみた結果、何が得られたのかについて語ります。

## 伝道者の書 2 : 1 - 17 (パワポ)

「あらゆる所有欲、物欲、支配欲、自己顕示欲を満たしてみたはものの、それらはすべて空しい無形の産物でしかなく、どんなに満ちたと考えても死を意識せずにはおられず、死を前にすると、何もかもが空しく感じて仕方がない」と告白します。

ソロモンの人生は、「こんなに羨ましい人生なんかないだろう！」と思ってしまうような満ちあふれた暮らしのように見えますが、ソロモン当の本人は、「私は生きていることを憎んだ」と吐露します。

### Part Three

先ほど見ました申命記の聖書箇所、「右にも左にもそれではならない」という言葉がありましたが、では、何が右で、何が左なのでしょう？

キリスト教信仰とか、クリスチャンのイメージと言いますと、もしかすると、「清貧、清く貧しい」というイメージがあるかもしれません。

では、「清貧、清く貧しい」ことは良いことでしょうか、それとも悪いことでしょうか？

もっと言いますと、私が勝手に作った言葉ですが、「清富、清く富む」と書きますが、「清富、清く富む」ということは良いことでしょうか？ また可能でしょうか？

清く貧しいことを求めるよりも、清く富むことを求める生き方をしてはいけないのでしょうか？

聖書の御言葉をそのままストレートに捉えようとするならば、神さまは私たちに「清貧でありなさい」と言うよりも、「清富、清く富む者でありなさい、あつて欲しい」と願っておられるように見えます。

そして、「神の言葉を心に蓄え、神の言葉に生き、神の御教えに歩むならば、個々人に相応しい幸せや繁栄は付いて来るようになっている」という約束が、聖書の始めから最後まで一貫して書かれているように思います。

問題は、その幸せや富や繁栄とは、何なのかということです。

この分厚い聖書には、色々ごちゃごちゃと書いてありますが、その内容は至って単純です。

「神はあなたを幸せにしたいと願っておられます。神の御言葉があなたを繁栄させ、幸せにします。だから、神の言葉に生きなさい。神の言葉を曲げずに受け入れ信じなさい」というのが、聖書の語る一貫したメッセージだと思います。

それと同時に、「ただし、その繁栄・幸せを手にした時、まかり間違うと、すべてが神の恵みだという認識ではなく、自らの努力、自らの正しさ、または人様のおかげゆえに手にしたものだ勘違いしてしまつてはいけません。

ともすると、そのように勘違いし、結果的に神のみおしえから離れてしまい、得た富や繁栄や幸せが束縛になり、その奴隷となり、翻弄され、目的となつてしまい、やがて空しさを吐露することになってしまうから、全神経を集中させて、注意しながら、神に寄り頼み、神の御言葉を日々の歩みの足の灯とし、神に祈りながら生きなさい」と、熱心に語って下さいます。

つまり、右にそれるとは、神の与えし富と繁栄を軽視し、無視し、あるいは悪と見なしたり信仰に反することと見なし、貧しいことを正しいとする一見すると清く見えてしまう禁欲主義に傾倒する世捨て人的信仰スタイルのことを言っているのだと思います。

また左にそれるとは、これとは逆で、「神を信じればお金持ちになる。願いが叶う。病が癒される。祈ったら祈っただけ叶えられるし、もし祈っても、礼拝を献げても、献金を賛美を献げても、物事思った通りに進んでくれないならば、そんな信仰には価値がない」と見切ってしまうご利益的な信じ方を言うのだと思います。

ゆえに、右にそれても左にそれても、そこに満足はありません。

右にそれると、そこには我慢しかなく、左にそれると、そこには不平不満クレームしかなくなつてしまいます。

使徒パウロの主イエス・キリストを信じる信仰・実生活は、我慢でもなく、

不平不満でもありませんでした。

そこにあるのは、満足でした。

#### ピリピ人への手紙4：11-14 (パウロ)

パウロにとって大事なことは、貧しくあることでもなく、富むことでもありませんでした。

パウロにとって大事なことは、清貧・清く貧しいことでもあり、清富・清く富むことでもありました。

つまり、貧しいか富んでいるかが目的なのではなく、そこに、神にある聖さがあるのかないかということなのです。

パウロは、「私を強くして下さる方」即ち、イエス・キリストによって富んでも満足、貧しくても満足、苦難にあっても満足という右にも左にもそれない生き方が出来ることが福音を信じることであり、神の言葉を生きることであり、神を信じ、イエス・キリストとともにその人生を生きるということでした。

#### Part Four

聖書の教えは一見しますと、右にそれるように、つまり、「神のみを信じれば、それ以外のことはまあ気にしないで！」というような事ばかりが強調されているような印象があるかもしれません。

究極的には間違っていないのですが、なぜ、「神以外のことはまあいいよ」という印象を与えるほどに、そちらを強調しているのかと言いますと、私たちこの物質世界に生きる罪人は、「神のみ信じれば、後は何とでもなるし、それ以外のことはまあ大丈夫！」という方にそれるよりも、「神を信じればお金持ちになるし、願いが叶うし、病が癒されるし、祈ったら祈っただけ叶えられるし、もし祈っても、礼拝を献げても、献金を賛美を献げても、物事思った通りに叶わないならば、そんな信仰には価値がない」という方に、左にそれやすいからだと思います。

事実サタンは、こっちの方に、左の方にそれやすい私たちの気質を利用して誘惑することが大部分だと思います。

イエス様を誘惑する時でさえも、左の方にそれるよう誘惑しました。

使徒パウロは、このこともよく知っておられたので、このようにも私たちに勧めてくれます。

#### テモテへの手紙第一6：6-12 (パウロ)

私たちが求めるべき生き方は、義と敬虔と信仰、愛と忍耐と柔和です。

そして、その信仰の戦いを立派に戦い、最終的に約束されている永遠のいのちを諦めることなく、約束通り獲得させて頂くことです。

## Conclusion

先週、我が家の妻お手製の美味しいキムチの蓄えが無くなって来たので、キムチを漬けるための白菜を、夫婦でスーパーに買いに行きました。

ところが、もう白菜の旬の時期が過ぎてしまっていたために、白菜の在庫もほぼ無く、しかも白菜一株の値段が税込900円近くもしましたので、買うのを諦めました。

そして、私が妻にこう小言を言いながら責めました。

「だから言ったじゃん！ 冬の安い時期に買って漬けときゃ良かったんだよ！」

すると妻が、「いやまだあの時はキムチも残ってたし、何よりも私の体調も良くなかったし、そんな時間もなかったのよ。また凹むようなこと言わないで」と、寂しがられてしまいました。

キムチを漬けるのは結構な重労働なのですが、文句ひとつ言わず、家族のことを思って美味しいキムチを漬けて笑顔で食べさせてくれる妻に対して、感謝するどころか、そんな恵みを当たり前のように思って責め立ててしまう敬虔でもなく、愛もなく、柔和でもない私自身の姿をいつものように晒してしまいました。

すると、その次の日に、突然ある教会員のご婦人から電話が掛かってきました。

そして、こうおっしゃるのです。 「キムチ用の白菜、一箱いりますか？」  
もうびっくりです。

経営しているお店のキムチが切れたので、キムチを漬けるために、たまたま私たち夫婦が行った同じスーパーに行ってみたら、あまりにも白菜が高くてお買いになれず、ガッカリしながら少しの希望を持って他のスーパーに行ってみますと、なんと、半額以下の値段で大量に白菜が売っていて、1箱白菜8株入っているものを7箱購入されたので、前日の我が家のキムチ事件を全然知らずに、1箱分を我が家に下さると言って下さったんです。

本当に感謝でしたし、私たち夫婦、互いの顔を見合わせながらびっくり仰天でした。

ここで学ばされたことは、「神の御旨と御言葉に従って歩もうと努めるならば、御言葉通り、神様は時に適って必要を満たして下さる方なんだ」ということと、「奥さんのちりを取り除こうと責め立てる前に、先ず自分の内の梁を見なさい」ということ。

そして、「右にも左にもそれず、白菜という肉の糧を欲しながらも、その奴隷になることなく、神の言葉を足の灯として歩むことを諦めなければ、こんなほっこりする幸せを頂けるんだ」ということでした。

そして最後に、「昨日は御免なさい」と一言、妻に謝りました。



大きな邸宅や金銀財宝や優れた知恵や知識がないことに不満を覚えるでもなく、神様だけ信じればそれ以外のことはどうでもいとストイックになるのもなく、肉の糧である白菜もしっかりと神さまに求め、そしてプレゼントとして白菜が与えられた時には大きな喜びとして満足出来る空しい人生ではない、キリストの身丈にまで達することに人生の照準を合わせ、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和を追い求めることに、最大の価値を見出せる人生をキリストにあって生きられるようにして下さったことが感謝で仕方ありません。

私たち一人一人が、「異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩むのではない人生を生きられたらなあ」と願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ４：１７